



Even so, as I come
それでも、明日がくるように
Tomorrow

夢を見た



葵色の
月の下

星が
降り注ぐ
茅場で

命の
欠片を
飲み込み



いつか腹を
突き破って芽吹く
甘い予感に
身を焦がす夢だ

一、刀剣破壊表現を含みます

一、本丸や審神者など
さまざまな独自表現を含みます





いつのまに
本丸に戻って
きたんだろう

起きたか



ぽっ



視界に霧が
かかっている
みたいだな

ズズズ



あまり
動かない
ほうが良い

手入れが
終了するまで
あと二時間は
掛かるぞ

三日月
さん？

グッ

グッ



お守りが発動
せねば
危なかったと
聞いている

わあ
張り切りすぎて
しまったかな



そんな派手に
やってたのかい

覚えて
ないや...

キョーッ

ニ



療養中のところ
申し訳ないが、
「刀剣破壊」された
ものが出てな

大事ゆえ
急ぎ共有しに
まいったのだ

誰

！



石切丸





心配無用さ
欠損もなし

主の霊力を
感じる

じつとしていれば
あらかた修復
できるはずだよ

…ただ



骨喰が心配
していたから
あとで願を
出すと良い

起こして
すまなか



血を多く
失ったから
だろう

フッ



あたまが
ぼうつと
して…



おや=ん

ぽろっ



どこかで



傷が開いては
いけないな
もうお休み

…うん

おやす

杉のにおい
がする

石切丸

清廉潔白な
かみさまの刀

僕とは
正反対の刀

生まれ持った
質とは違い
陽だまりの下で
笑っているのが
似合う刀だった

仲間からも
好かれていた

でもどこか一步引いて
本丸の行く末を
見守っていた記憶がある

話したこと
なんて

ほとんど
なかったのに



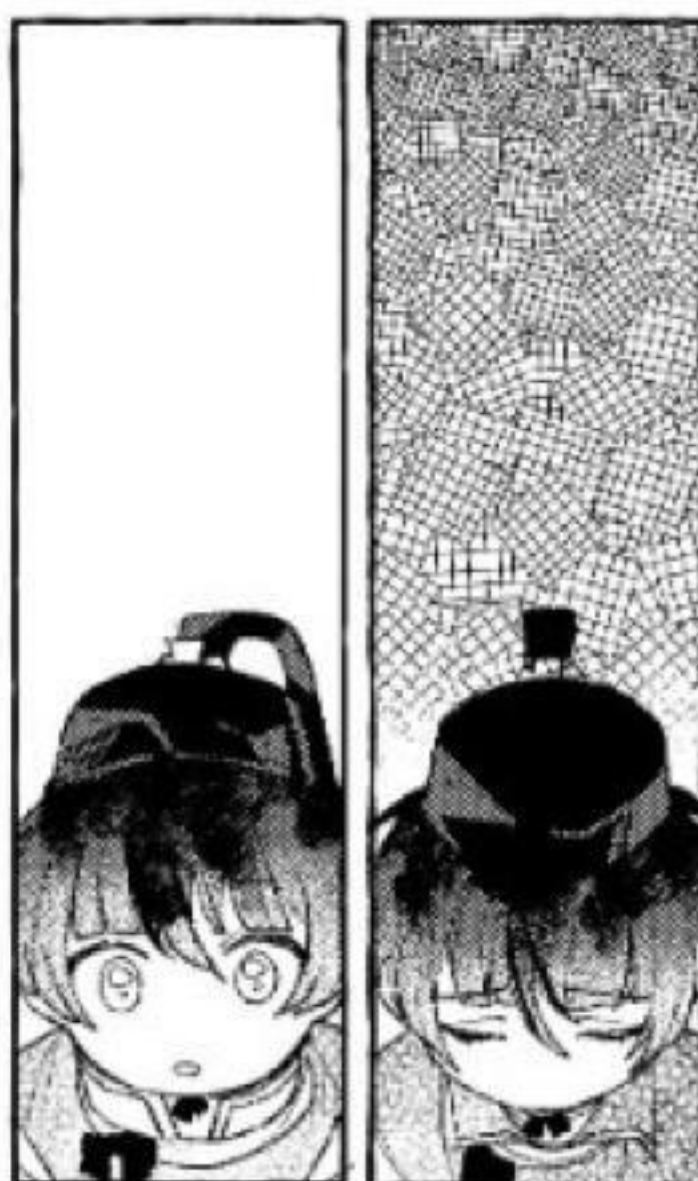
どうして



こんなに
胸が痛むんだらう















ほら僕
そういうの
専門外だからさ

敵たり
者めたり



情報収集？



何もしない
わけにも
いかないし

とりあえず
情報収集
からかなあ



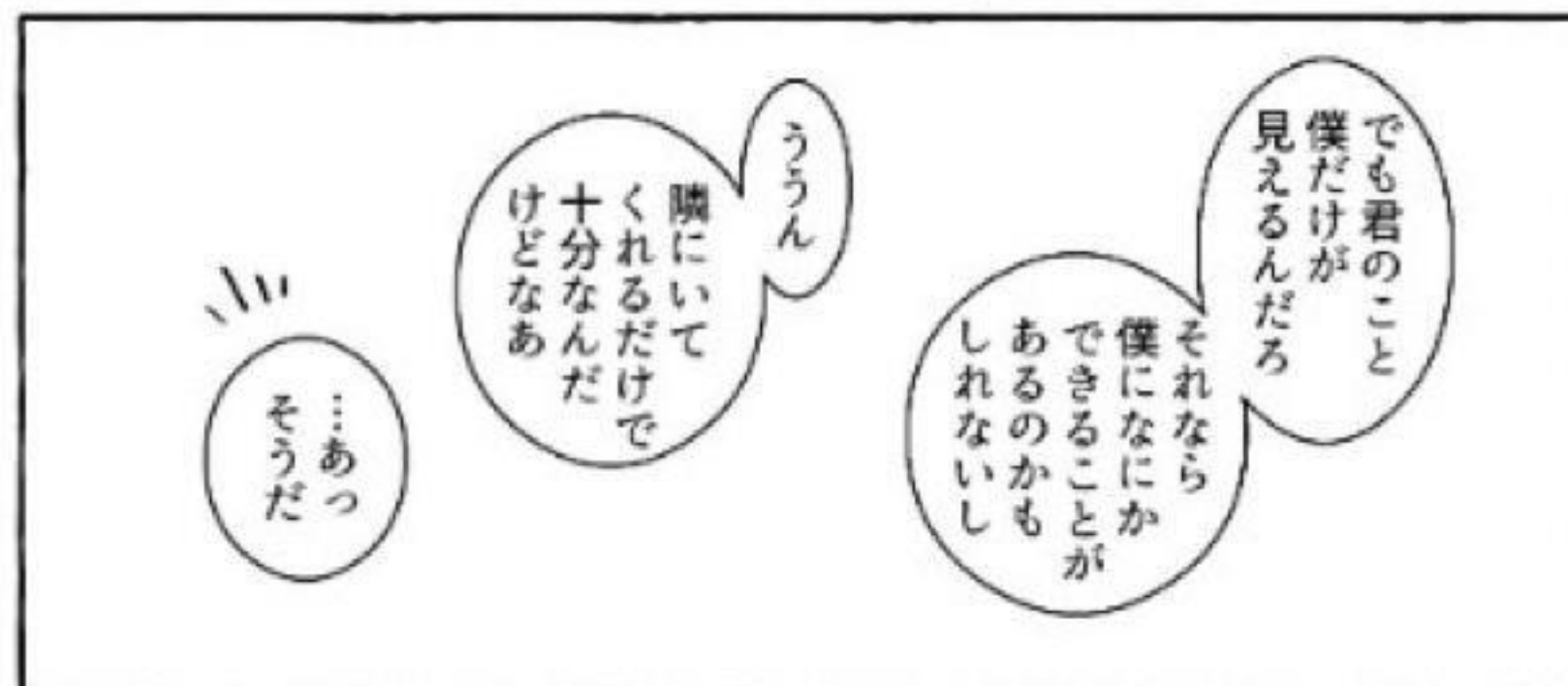
手伝って
くれる、とは
聞いたけれど...



太郎太刀や
次郎太刀に
聞いても
いいけど

いや、
主経由で
時の政府に
報告が行ったら
厄介そうだし

ふむ...



でも君のこと
僕だけが
見えるんだろ

それなら
僕になにか
できることが
あるのかもしれない

ううん

隣にいて
くれるだけで
十分なんだ
けどなあ

...あつ
そうだ



ちよっと
書庫の本を
見に行つて
くるね



青江さんに
手間を取らせる
つもりはないんだ

本当に気に
しなくても
良いんだよ





彼は本当に
この本丸に
「居る」だけ
だった



石切丸さんは
自分を殺した
誰かを恨む
ことなく



本丸に生きる
刀剣男士を
羨むことなく



本丸の生活は
誰かが欠けても
続いていく



ただ生前と
同じように
そこに在った

唯一の
誤算は





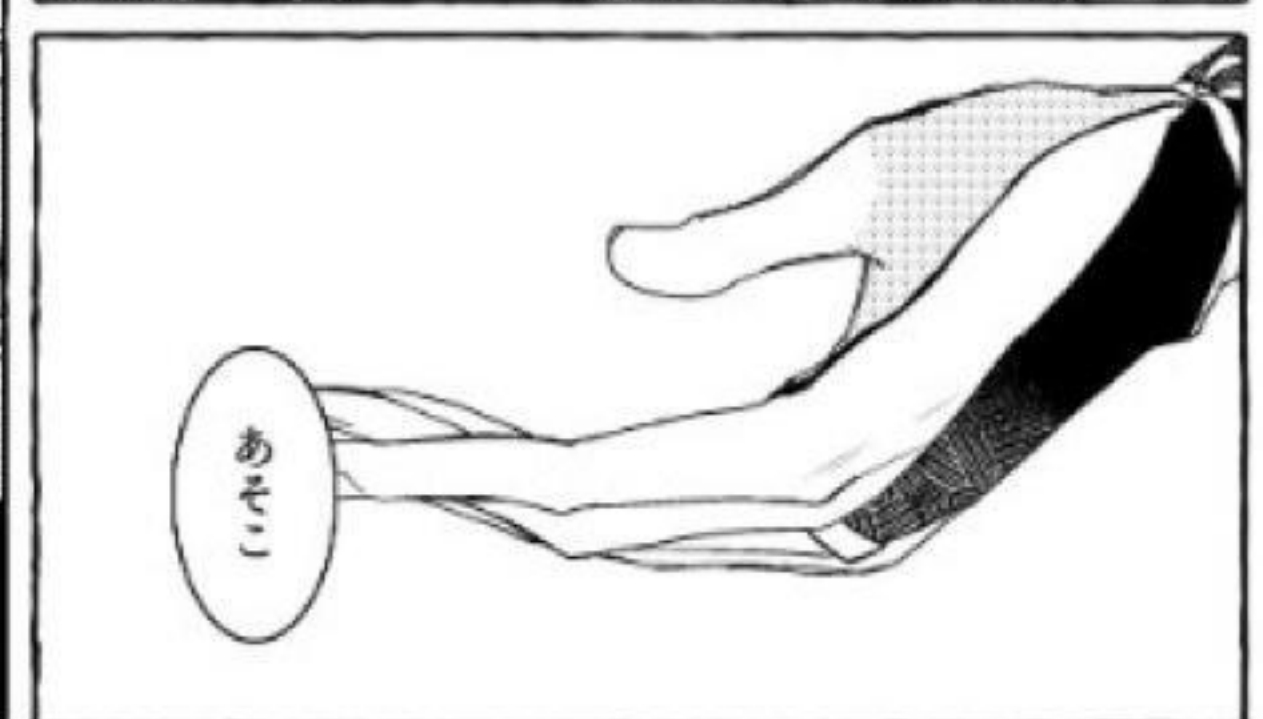
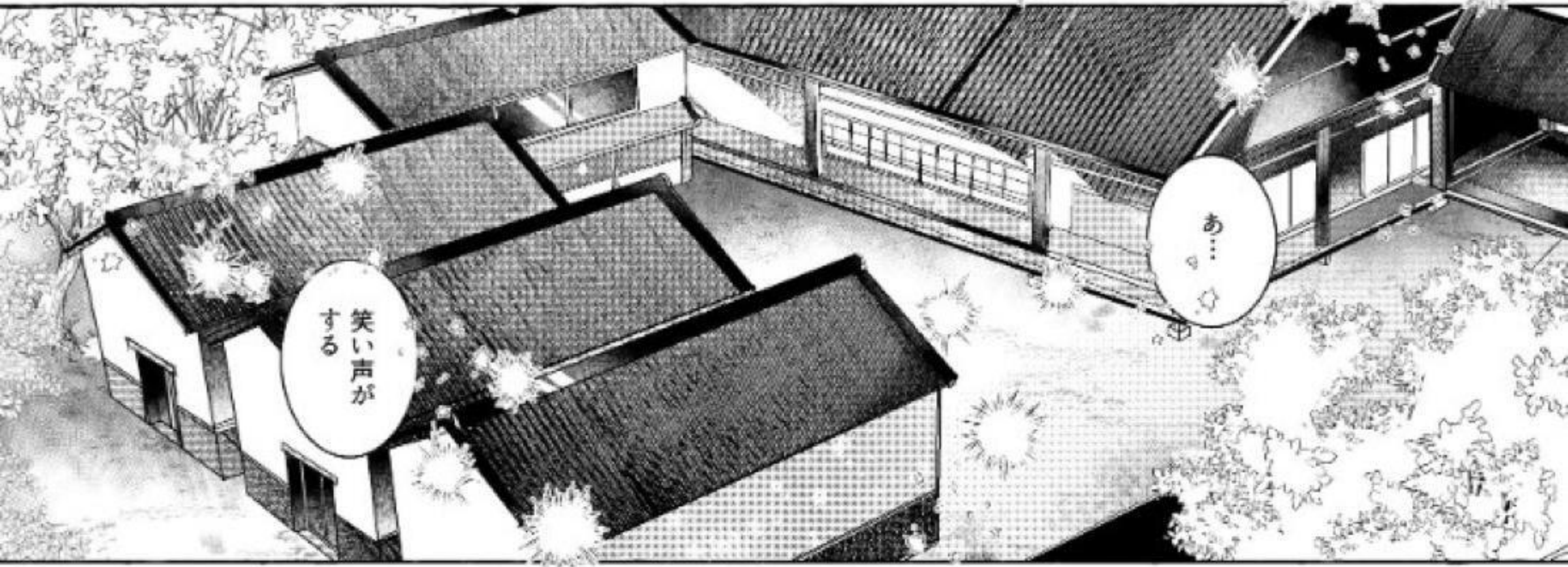
石切丸さんが
僕のもとを
離れようとする
こと以上に

涙のような
虚しさが胸を
埋めることは
なかった













石切丸さんが
見る世界は

すべてが
眩く輝いて
いるようだ



朝起きて



顔を洗い



陽の光を
浴びて



食べ物
を口にする



内番に
精を出し



仲間を
出迎え



鍛錬をして



戦う
日々を重ねた

そのうちに
戦場に復帰する
許可をもらい



石切丸さんは
僕が知らなかった
世界のことを
ひとつひとつ
指し示していった



祈祷の仕方
和歌の読み方

本丸の仲間たちが
好んで食べる物

折り紙や
手習い
物が何かを
生み出す面白さ



空気の澄んだ
朝の静けさ

良く本丸が
見渡せるとい
う山の上

お気に入りの
昼寝場所



孤独が

愛しみに
溶けると
いうこと



刀が産まれな
おす
というの
おかしな話
だけれど

石切丸さん
を通して
ものをみる
ことば
まるで
産まれな
おす
いるよう
だ



世界を
美しいと
慈しむ
その心が

鏡のように
彼に返って
いると思っ
た



彼と一緒に
明日を
過ごしたい



日を重ねる
に連れて
その思いは
増していった

僕を見て
石切丸さん

僕を――



青江君

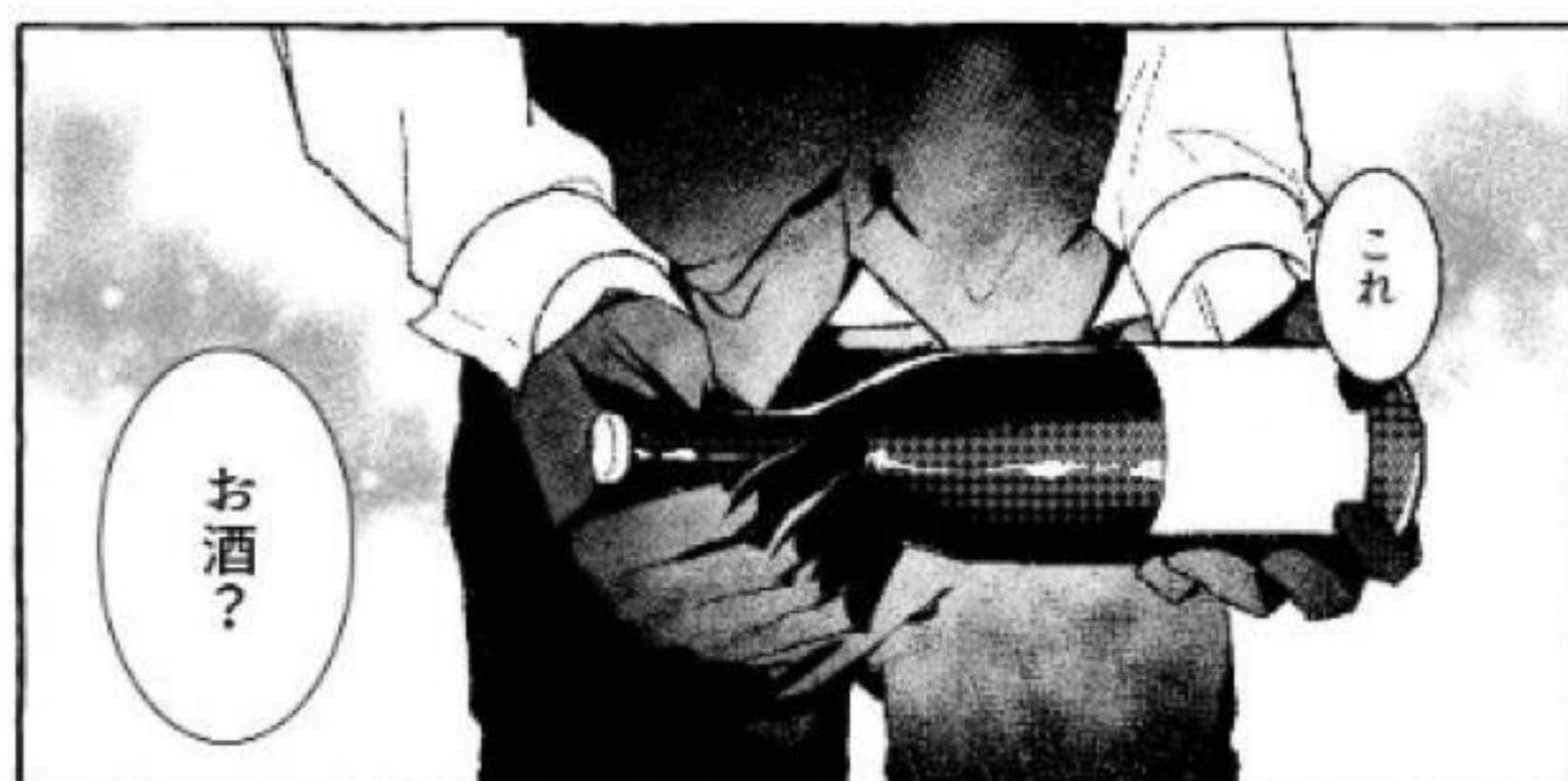
内番お疲れ様
いまちよつと
いいかな？



燗台切も
お疲れさま

問題ないけど
何の用かな

やあ
ちよつと
渡したいもの
があつて



これ

お酒？



ほう、
よく分けて
って来て
くれてた
だろう？

え

快気祝いと
思つたんだ

あほほ



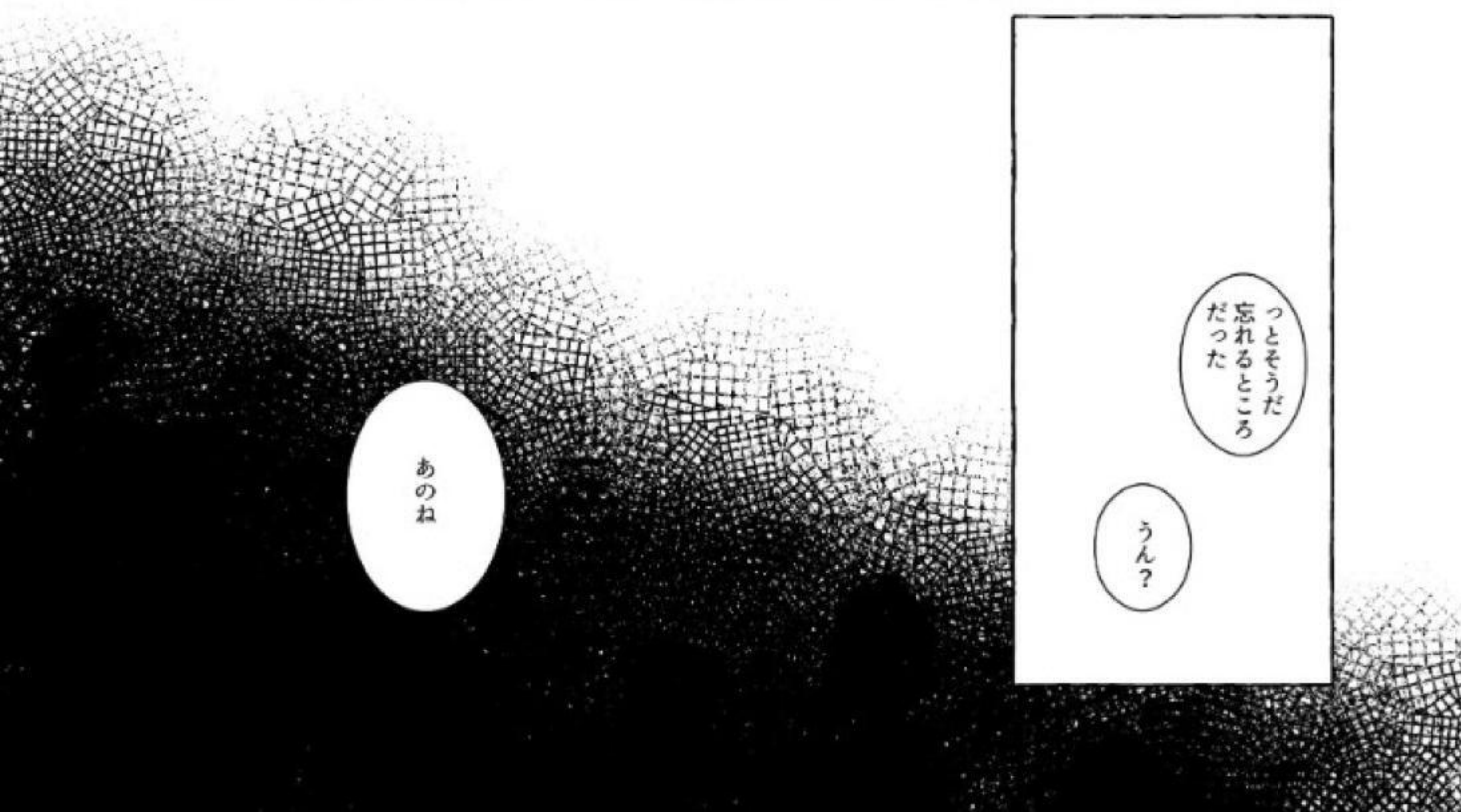
そんなこと
してたっけ

記憶に
ない……



元気になつて
くれて本当に
良かった





いいものが
あるんだ



いいところ
じゃないか
石切丸さんは
物知りだねえ

お気に入りの
場所なんだ

もうひとつ
とっておきの
場所がある
のだけれど
また機会が
あれば案内
するよ

夜って
僕にとっては
戦場に出る
印象が強くて

あまりゆっくり
することも
なかったけど

こういうのも
悪くないね

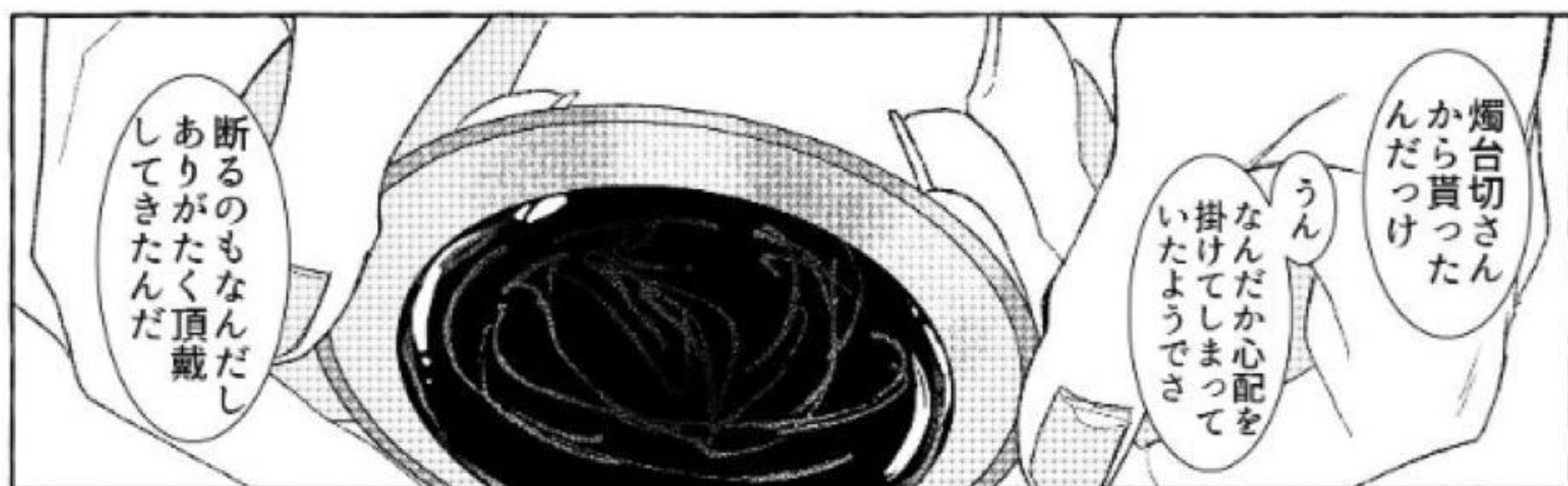


あつ
おいしい！

日本酒って
あんまり
飲まないから
新鮮だなあ

結構好き
かもしれない

また好きなもの
見つけられて
良かったか
じゃないか



燭台切さん
から貰った
んだっけ

うん
なんだか心配を
掛けてしまっ
たようです

断るのもなんだし
ありがたく頂戴
してきたんだ



そういえば
今日の畑当番は
桑名江さんと
だったよね
初めて話してみ
てどうだった？

ああ なかなか
変わっていい
良い刀だったよ



えっ…

土を
たべてた



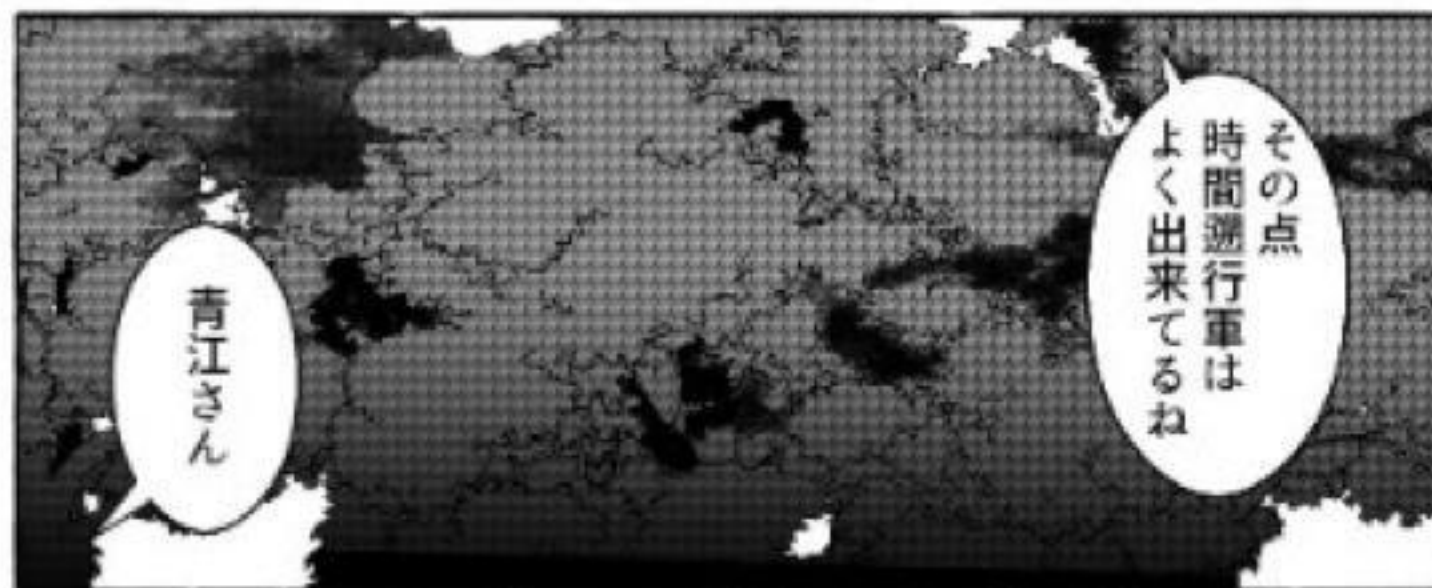
あつ
小松菜と
じゃこの
和え物だ

青江さんが
好きって
言うたの
だね

こっちは
シソの葉で
鶏のささ身を
巻いてる！

うん
明日お礼を
しないと
だなあ





僕たちを
生かすものは
なんだろう

クハッ

石切丸さんや
本丸の仲間と
こうして話す
ようになるまで

そんなこと
考えたことも
なかった

僕たちはもう
物言わぬ
銅ではないのに

食べれば
嬉しいし

仲間が
傷つけば
怒る

別れは
悲しい
ものだ

生きることは
…楽しい

人の身で
あなたと
見る世界は
綺麗だ



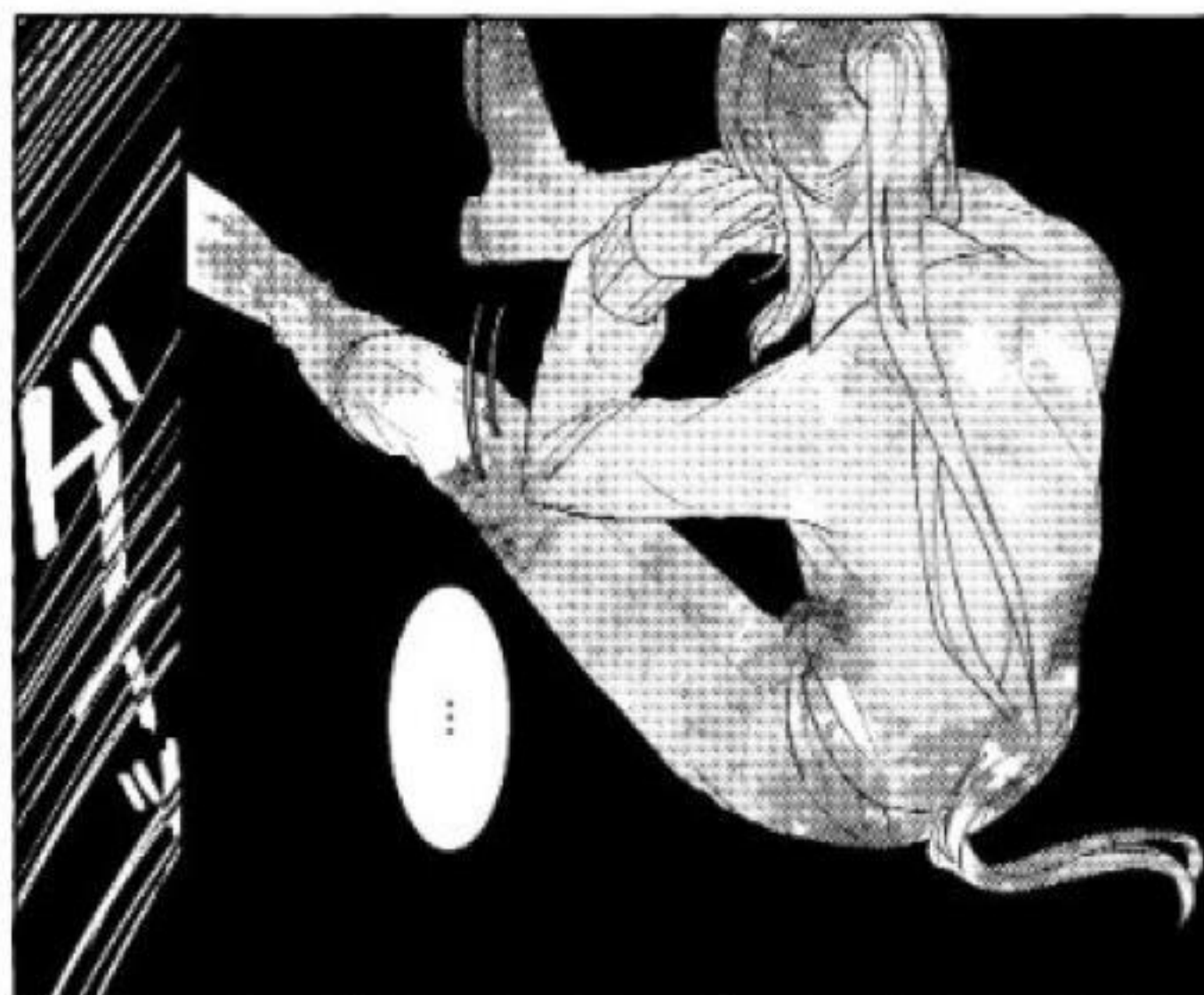
石切丸さん
僕

私には
過ぎた
言葉だね

話が聞けて
よかった

青江さんが
本丸の皆と
楽しそうに
していると

私はとても
安心する



あつそのお酒
度数高いから
あまり飲みすぎ
ないほうが...

あのさあ
薄々思っては
いたけれど

君は

きみは
ひどい

僕に教えるだけ
教えようとして
自分には何も

何も...

酔って
しまわれた
のかな
もう帰ろう

僕から
逃げるな



…逃げて
なんかないよ

嘘だね



僕が君に
近づこうと
すればするほど
君は逃げていく

君が気になるのは
僕と僕の仲間たち
とのことだけ

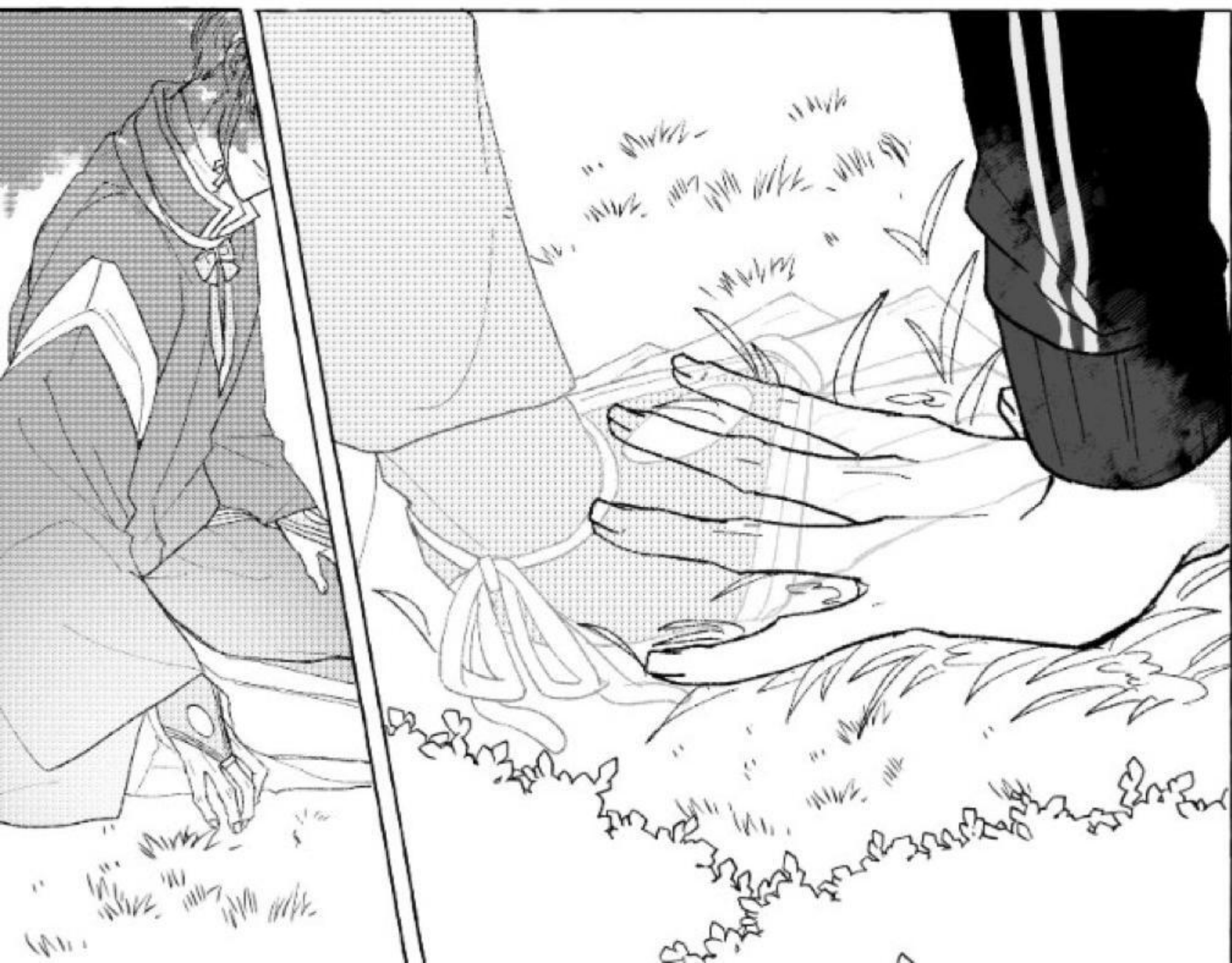


青江さん
違うんだ

ちがく
なんて
ないじゃ
ないかつ



本当に
違うんだ…



「一緒にいて
くれるだけで
いい」

身体が持たなく
なってきたんだ

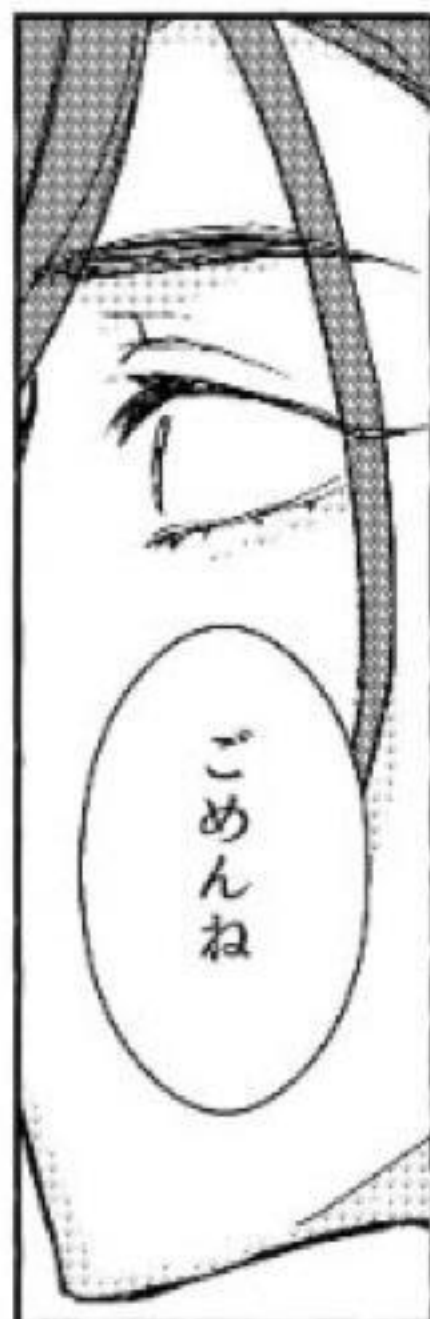
時折自分が
空気に融けて
いくのを感じる

「きつと
そう長くは
かからない」

消える
その前に

私の未練を
断って

青江さんを
解放できると
よいのだけど





はー

言えなかった



っていえば
よかったのに

なんで君が
謝るんだ

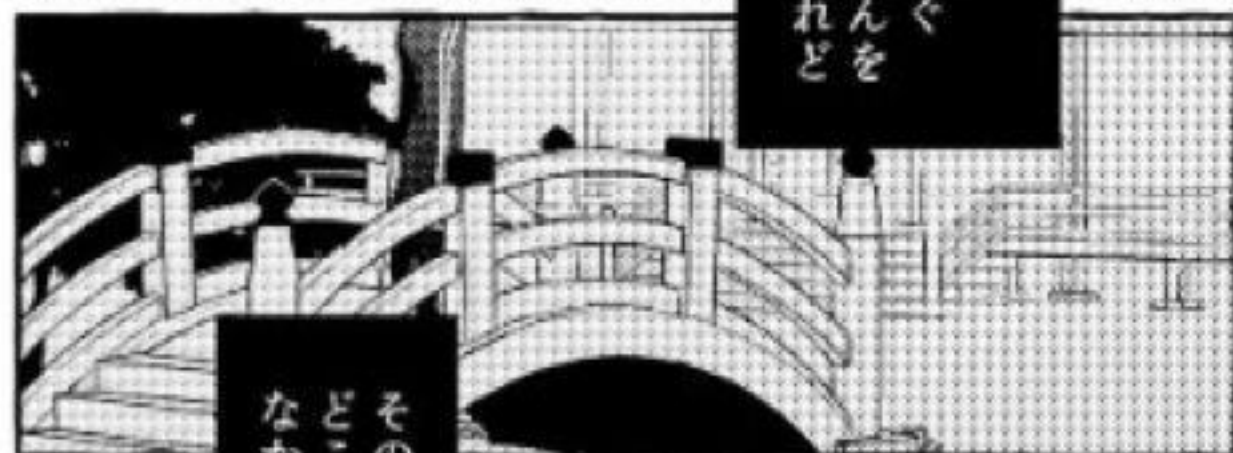


僕たちは
確実に明日へ
進んでいくのに

彼だけが
昨日に
囚われ
続けている



昨晩は
帰ってすぐ
石切丸さんを
探したけれど



その姿は
どこにも
なかった



その火が
消えても
まだ



悲しい目を
していた

まさか

僕に黙って
行ってしまった
んだろうか

いや そんな
ことないはずだ





いつ撮った
写真だ？











なんで

石切丸
さんって？

分かるさ



やはりな



え？



昨年の秋から
だったか



ずっと
お前たちの
隣で見て
いたから



何も言わない
ことが逆に
良いんだと
よく話して
くれていた



俺には
そうだった
ことはよく
分からないが





石切丸を
探している
ような様子
だったから

…きっと



父や



兄弟と
話していた
ときから気に
なっていた



完全に想いを
忘れること
なんて出来る
はずないと

俺はそう
信じたかった
のかもしれない



…まだ完全には
思い出して
いないようだが



そのたびに
胸がきしんで
痛んでいたのは



僕は—

石切丸さんが
僕のもとから
離れようとする

僕がなにか
大切なことを
忘れていた
からなのか？

なあ
にっかり

穴が開いた物が
そのままでは
埋まらないように

無くしたものは
何か違うもので
埋めるしかない

でもお前は
無くして
なんかない

ただ見なかった
振りをして
いるだけだ

そんなこと
あいつのためにも
お前のためにも
ならない

どうか
思い出して
やってくれ





石切丸さん



しっかり
折れちゃ
だめだ

もう敵の
気配はない

あ...

石切丸
さんっ



まだ
もうひとつ

僕の
お守りが
あるから

だからっ

みんなと

ごうりゆう
しなくちゃ

行っ
て

くれるね

馬鹿っ
こんな状況で
僕だけで
いけるわけが
ないだろう



青江
さん



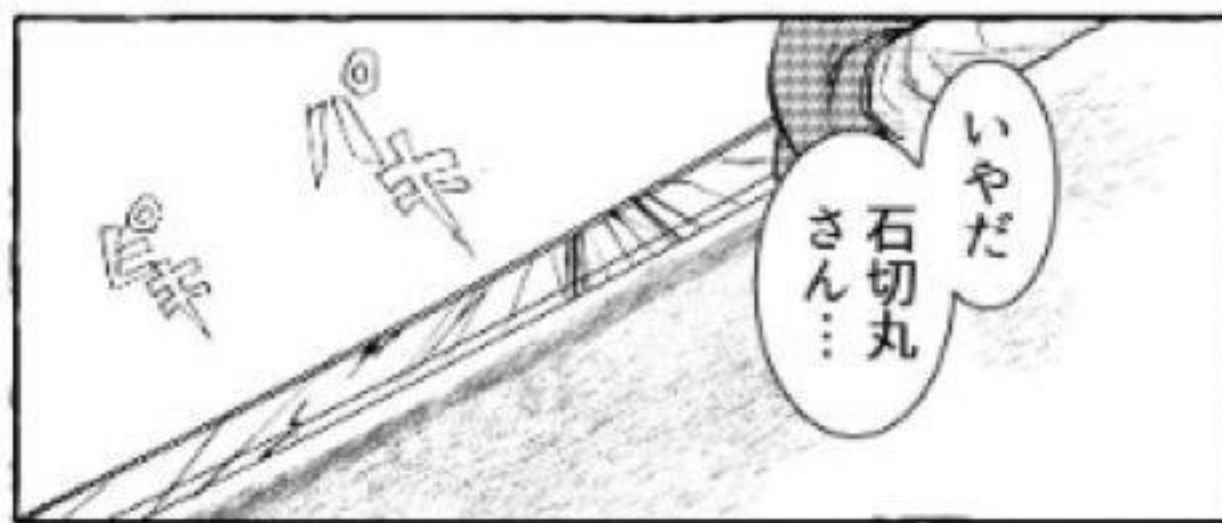
泣か
ないで



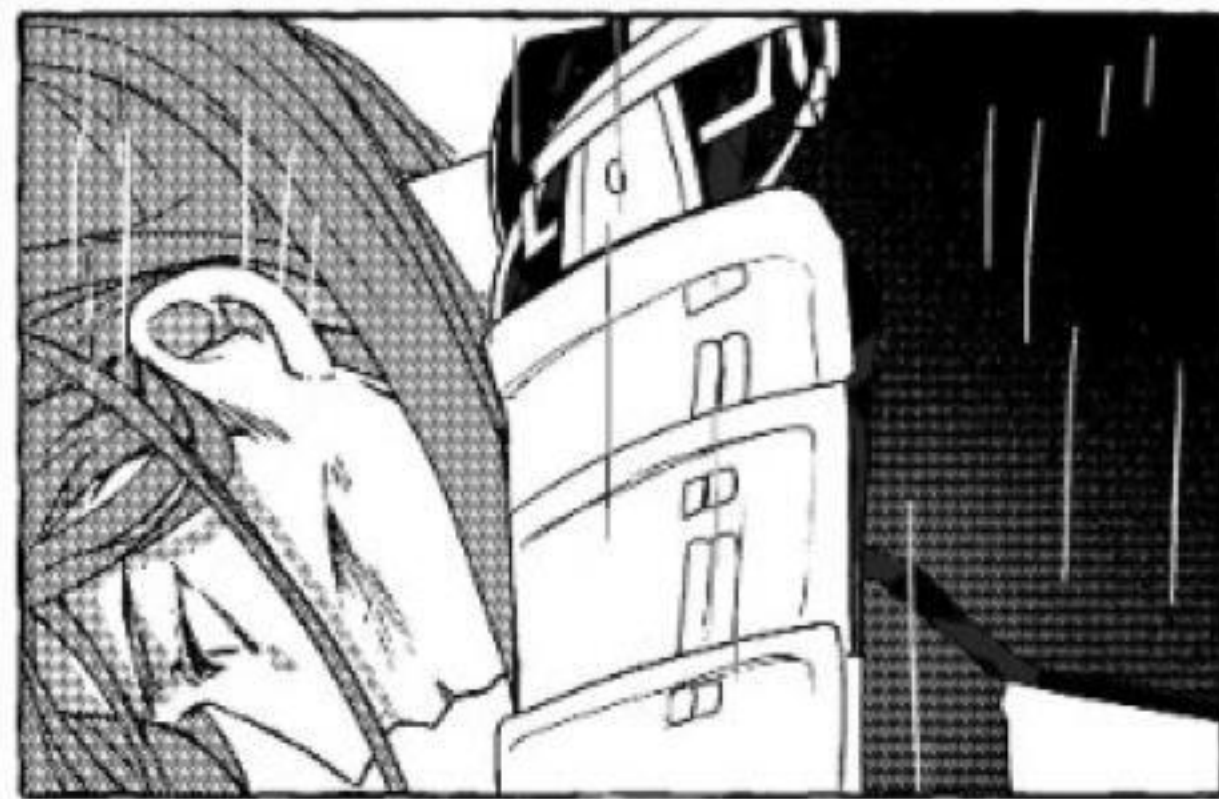
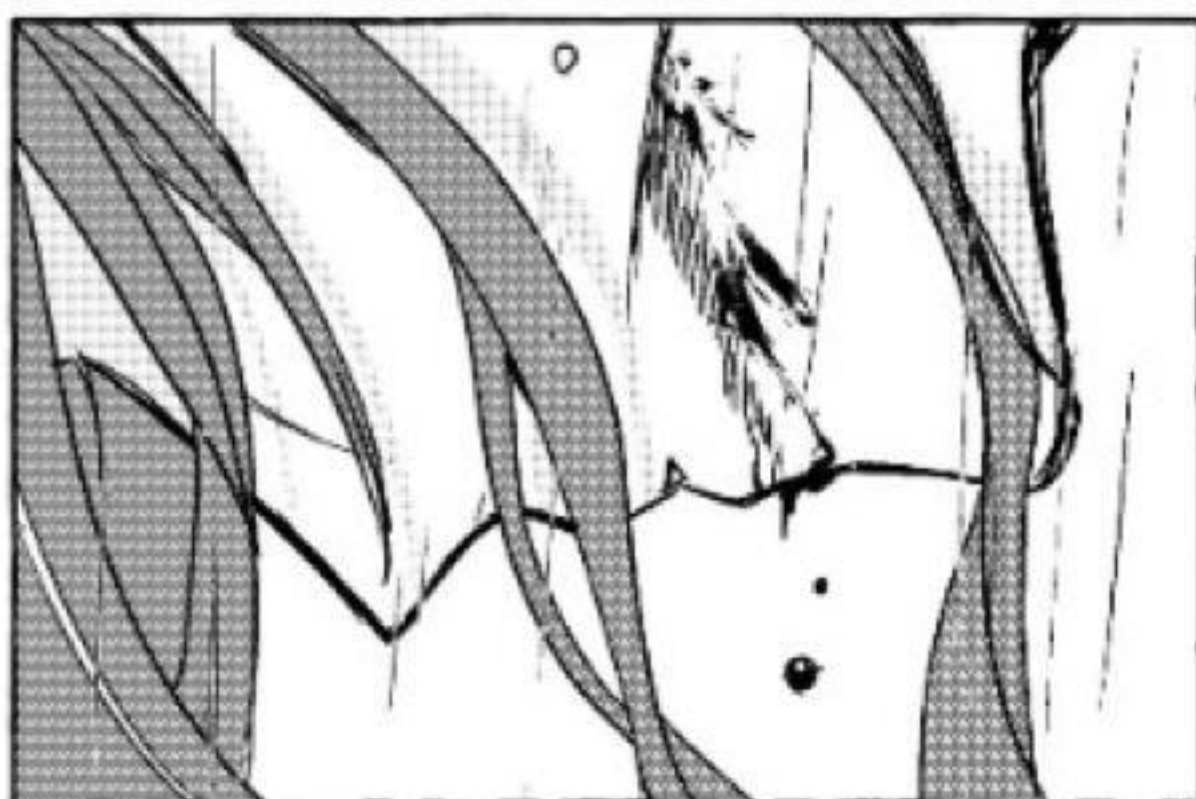
ねえ嘘
嘘だよ
血が止まら
ないんだ

お守り
効いてよ
頼むよっ









君が
いなければ

笑えないよ

石切丸さん

帰還して
すぐのこと

僕は青野原への
出陣を繰り返し
懇願した

出陣しても
どうにもならない
ということは
十分に理解していた

砂漠から
一粒の塵を
拾い上げることが
出来ないように

折れた刀は
元の姿には
戻らない



それでも



石切丸さんに
あいされた
この記憶が

鮮明に
残っている
まま



戦刀として
敗れたかった



主には直ぐに
本意が伝わった

そして幾度目かの
重傷を負った日

石切丸さんに
出会ってからの
彼に関する
記憶をすべて
忘れる術を
かけられる



一步を踏み出す
その日まで

僕が誘惑から
逃れられる
ようになるまで



ごめん骨喰
僕もう
行かなくちゃ

！



どこへ
行くんだ

石切丸さんの
死を乗り越えて



気を付けて
行ってこい

…ああ



もう心配
しないで
大丈夫だから

ありがとう

…



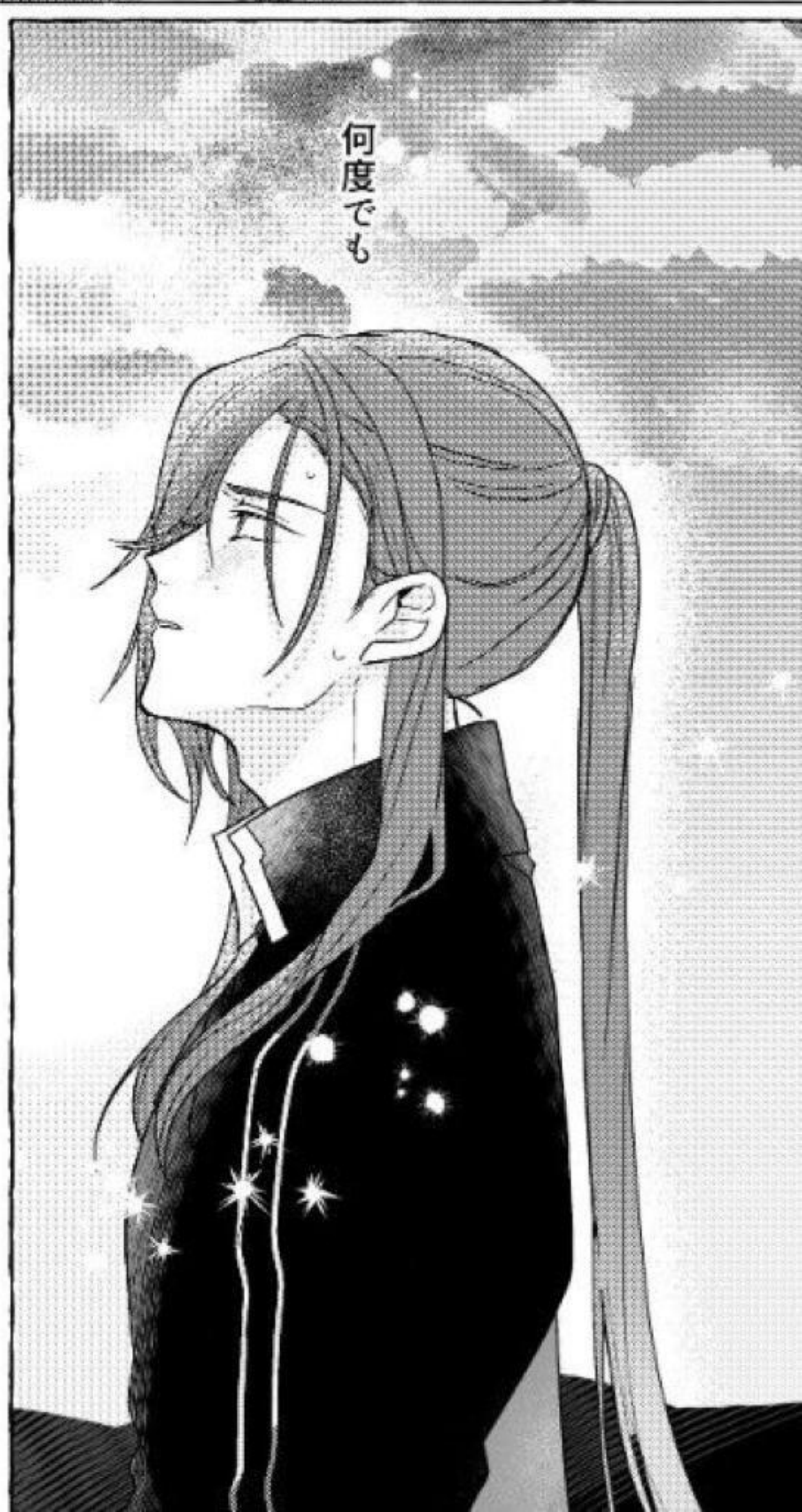
石切丸さん

石切丸さん





恋をして
しまう



何度でも



それ以上に
僕はもつと
ばかだ...



石切丸さんは
ばかだ ばか

でも



あのとき
の願い事

叶えられなくて
本当に済まない

...ばか



もう一度
あと一度で
いい



誰かを
いとしく
想うことは

私たちが
生かしても
殺しもするね



気が付いたら
手入部屋で眠る
青江さんの前に
立っていた

最初は
ただ呑気に
喜んでいたらよ

君の行く末を
少しでも
見守れると



青江さんの笑顔が
見たかったんだ

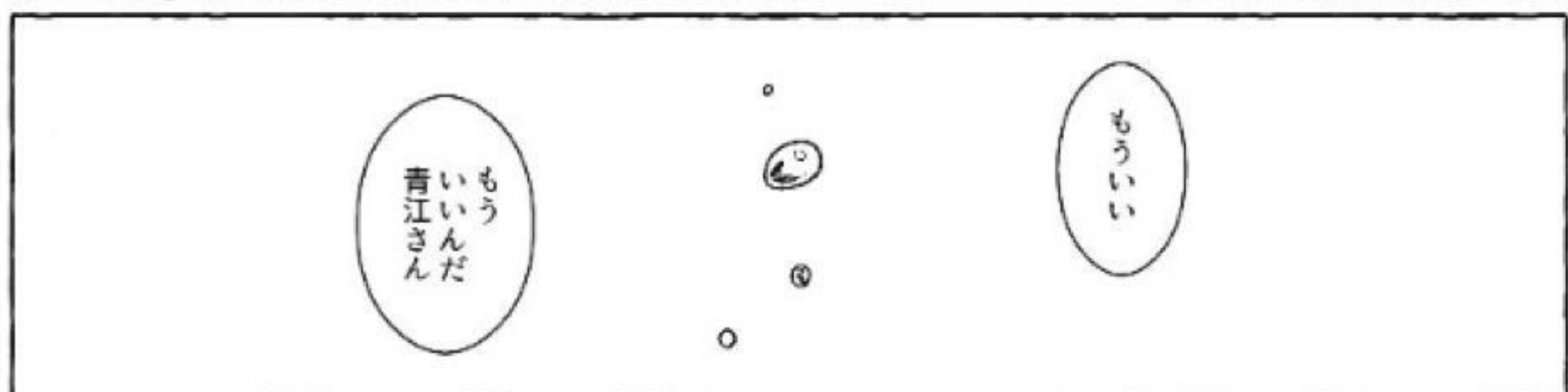


壊れていく様を

進むことも
逃げることも
できずに
ただ消耗して

ずっと近くで
見ていたよ

後になって
私の身勝手な
願いが
青江さんを
苦しめている
ことに気が付いた



もうここ

もう
いいんだ
青江さん



ごめん

ごめんね

ごめんね

だから、私は
殺そうとした





青江さんのなかに
生きている私を
ころしたかった



青江さんに
知ってほし
かったんだ

私以外の
ものを

青江さんが
生きていく
世界のこと

その
美しさを



それでも
僕は

またあなたを
好きになったよ



夜が明けて
朝日が昇る
ように

冬の後
に春が
来る
ように

何度も

何度だって

君を
好きに
なる

植物の話を
したろう

僕たちも同じで
また生まれるんだ

芽が出て咲いて
実をつけて
枯れていく
花と同じ

命が続く限り

そうして
お互いを
好きになつて

そうして
また廻つて
いくんだよ



僕は待つよ

ずっと
ずっと

暁の星が瞬くまで
君を待ち続ける

僕だけのものだ

君と一緒になら

これは

この感情は

僕の中の君を
殺してなんか
やるものか





僕も石切丸
さんのこと

だい、

—
...



大好きだよ



自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉に接吻した。

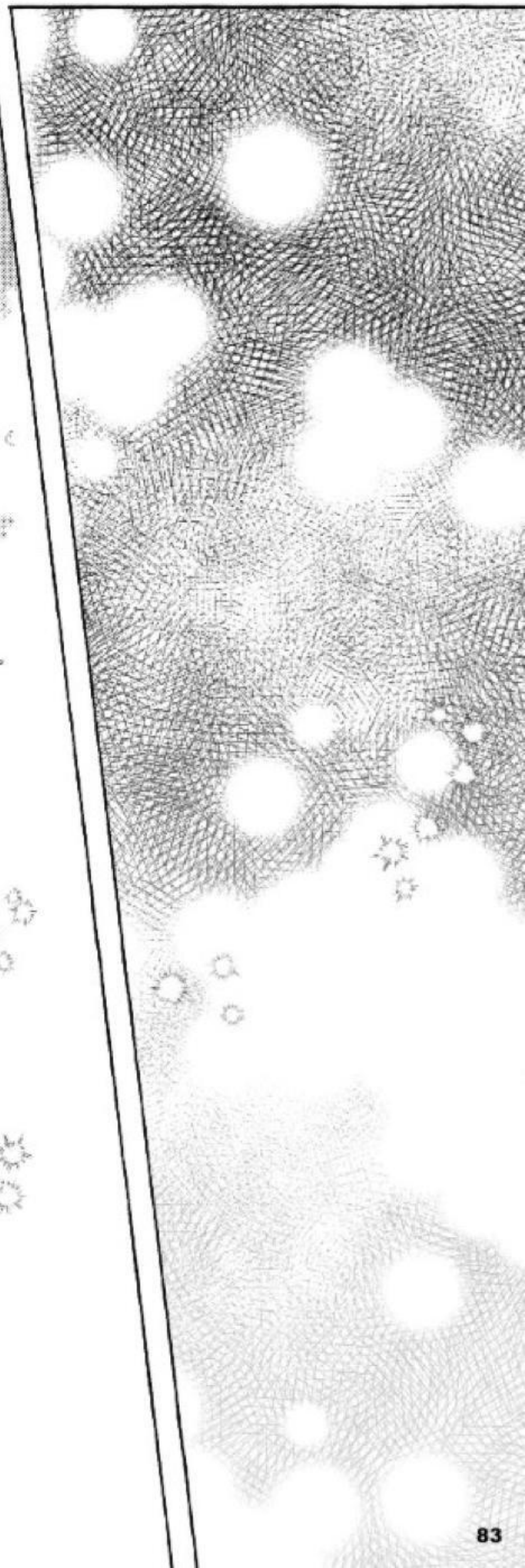
自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。
「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

——夏目漱石 夢十夜





石切丸！





良い天気だ
散歩中か

おや三日月
さんじゃないか

どうした
んだい？

いやなに



うん？



ありがとう
昨日は歩くのも
やっとだったけど

でももう
平気だよ



新刃はもう
この身体に慣れた
かなと思ってな



ほら



カーン
カーン

遠征部隊が
戻ってきたな

ああ
それは出迎え
なくてはね



あそこだ



それでも、明日がくるように 了

